

区別される左上腹部の ^{67}Ga 集積の描出を陽性とし $^{99\text{m}}\text{TcSn}$ コロイド肝スキャンで位置形態を比較参照して、その判定は視覚的に2~3人の放射線科医の一致によった。

脾臓描出陽性者は32名で陽性率は30%であった。また異常集積(+), 若年齢, Tprotein 高値, 血清鉄低値, splenomegaly (+)の方が描出率はやや高い傾向にあったが、その差は有意ではなかった。しかし、血清鉄, splenomegaly に関しては比較的その差が大きく今後症例をふやして検討する必要性を認めた。

12. Splenic sequestration scintigraphy が有用であった症例(第2報)

中嶋 憲一 油野 民雄 利波 紀久
久田 欣一 (金大・核)
立野 育郎 (国立金沢・放)

一般的に splenic sequestration scintigraphy は手技が煩雑なこともあり施行される頻度は少ないが、今回有用であった症例を供覧し適応について考察を加えた。標識はピロリン酸(塩化第一スズ加)静注30分後に採血した血液に $^{99\text{m}}\text{Tc-pertechnetate}$ を加え50°Cの湯浴中に35分間おいて行った。

症例1) 66歳男。Hepatoma の症例で肝スキャンで発見されない多発性脾内転移が脾スキャンで認められた。

症例2, 3) 64歳男, 54歳男。ともに真性多血症であるが脾内に多発性欠損があり脾梗塞と推定された。

症例4) 生後3週男。単心房単心室, 右胸心, 肺動脈狭窄など先天奇型のある症例であるが、肝スキャンでは評価しにくい肝脾の逆転が脾スキャンで明瞭に示された。

症例5) 55歳女。肝スキャン上は正常脾が認められず、脾スキャンでは小さい脾組織が2か所に認められた。

脾組織の存在の確認, および脾疾患が疑われるが肝スキャン上不明なときは、積極的に脾スキャンを施行すべきである。

13. 骨シンチグラフィにおける頭蓋骨への異常集積例の検討

上村 孝子 仙田 宏平 佐々木常雄
佐久間貞行 (名大・放)

当科で管理中の乳癌症例において、しばしば認められる頭蓋骨のびまん性集積像について検討した。

頭蓋骨びまん性集積像を認めたのは、乳癌症例では29例中12例(42%), 非乳癌症例では22例中5例(23%)であった。乳癌症例のびまん性集積陽性例と陰性例を比較すると、陽性例が高年齢層に多く、血中AIP値が優意に上昇していた。

頭蓋骨びまん性集積像は経過からOsteoporoticな変化と考えられ、乳癌発症に関与するとされているhormonalな異常との関連も老齢とともに示唆された。

14. 胃癌の骨転移——骨シンチグラフィによる考察——

瀬戸 幹人 利波 紀久 小泉 潔
久田 欣一 (金大・核)

骨転移という観点からはその頻度が低いために注目され難い胃癌の骨スキャン施行例60例を検討したところ15例に骨転移を認め(25%), また胃癌の臨床的諸因子と骨転移率について興味ある結果を得た。

すなわち隆起性胃癌, 幽門部占拠癌, 上皮内癌と漿膜浸潤のない進行癌, 領域リンパ節転移が原発巣から3cm以内のN₁までのもの, 高分化腺癌, 乳頭状腺癌には骨転移を認めず, 体部占拠癌, 近接臓器への浸潤のある進行癌, 管状腺癌では骨転移率が高かった。

骨転移例15例中3例に臨床的にも骨スキャン所見も非常に類似した特徴をもつ“び慢性骨転移例”を認めた。

肝転移率が幽門部癌に高く, 骨転移率が体部癌に高いことと, 骨転移例の少なくとも60%は肝転移を認めないことと, 肝転移率は骨転移率とほぼ同率で明確な関連のなかった事実より, 骨転移様式に従来の門脈型以外に, 脊椎静脈叢の関与する非門脈経由の存在を新たに推察した。